

バレーボールの思い出

三年 太田 敏子（昭和三八年度）

私たちは親善バレーボール大会に出場するために練習にはげんだ。とても苦しかったあの頃、毎日毎日の練習でクタクタに疲れ、勉強する気力もなかった。その反面少しずつだけれども上手になってきた時は、私たちに、「何事もやれば出来るんだ。」と言う気持ちを湧き立たせ、合宿することになった。

最初は、合宿というものを楽しみにして、簡単に考えていた私は、いかにむずかしく苦しいものであることがわかった。合宿するにあたってまず計画を立て、朝、昼、夜の炊事当番を決めて順調に行った。料理の仕方。朝早くから練習をして疲れはてた身体も、朝食をとるとすぐになおってしまいそうなあのごちそう。食べ終えて又練習をやり。ウサギ跳びやその他、又今までよりも一層足が痛くなった。あの気持ちといたら、言葉に表現されないくらい、いやでした。でも、みんなの顔を一つ一つ見て行くと、自分だけが苦しいんじゃないというような気持ちもしました。

みんなまるくなってパスをやる時も、白分が苦しくなってくると、キヤプテンに「早く休ませてくれ。」とか言ってキヤプテンを困らせたこともあった。ワンツー・ス目ノーと数えながら。いくつになつていたかも忘れて、一生懸命にボールを追う。少しでもボールから目をそらすと先生にボールをぶつつけられながらやっているうちに、時間はたちまち過

ぎ去っていく。夕食の当番は練習をやめてごはんの仕度をする。残っているものだけで、その人たちの分も一生懸命に練習をやった。

夜の風景を眺めながらごはんを食べたり、今までの疲れはてた身体をなおすために風呂などに三人ずつ入ったりした時の気持ちは、なんとも言えない楽しみでした。外に出て、一日の反省をして床に入り、勉強する人は勉強したり、ねむいものはねたり、又、ねむたくても「蚊」がいるために眠れなかったりでした。

合宿も終わる頃、ちょうど料理の材料はなくなり、困ったのも私たちにはいい勉強になりました。料理の仕方が上手だと先生にほめられた気持ちも忘れることができません。

いよいよ目指す試合も間近に迫り、島を出発する前、先生方と試合をしていった。その結果はよいとは言えなかった。酒田に着くと三中の生徒と一緒に練習したが、中々思うようにならなかった。それにしても三中の生徒みんなが親切にしてくれましたので、とても気持ちよく帰りました。

親善大会は二中会場で、抽選の結果鳥海中とあたり、何せ対外試合は初めてですのでポーツとなり二対一で敗れてしまいました。「練習不足とはいえないほど練習したのに。」というくやしさが湧き起こった。でも私たちは正々堂々と戦ってきたつもりだ。

間もなく卒業ということになりますが、バレーボールを通じて得た体験を土台として、立派な社会人として生きたいと思っています。